



おすべりが多いという事が特徴の一つである志賀山流でこのようにおすべりが皆無というのは意図的と考えられる。

(結果)

以上、「松の緑」と「老松」は同一技法をポイントとして段階を踏んで稽古する為にプログラムされていると考えられる。「ひねって出す」技法の中には「ひねり」「体軸」「体の向き」「足の動き」など、様々な技法が含まれており、「松の緑」から「老松」へと稽古する事によって段階的に技法を習得する事が可能となる。

(考察)

では、ここで取り上げた同一技法の「ひねって出す」動きが踊りそのものにどのような効果を与えているのか考えてみたい。まずひねって出す為にナンバという動きがあるが、このナンバは武道の構え、農耕作業などに見られるように素朴で力強い動きである。その動きにひねりが加わる事で厚みが出てくる。そして後ろの足をすべらせ前に出す。この時の呼吸は、

- ①ナンバで出た時に吸う。
- ②ひねった時に止める。
- ③足を出す時に吐く。

となっている。この呼吸のタイミングと足を前の方向に出す時に生じる「間」が踊りに不思議な味付けをするのである。この「間」は人それぞれに異なり同じ振りでも人によって違った印象を与える。又、特に御祝儀もの場合、踊りの中に効果的に使われる事によって、改まった感じや緊張感を与える事が出来る。

——この技法が見られる踊り——

長唄「加賀屋狂乱」「京鹿子娘道成寺」「男舞」清元「保名」「子守」など。

御祝儀ものに限らず、所作事の中にも多く出てくる。

(結論)

前回の研究では「手習子」と「道成寺」を取り上げた。この二曲は曲そのものに共通部分があり、段階的習得が取り入れやすかった。しかし、今回は共通点は長唄で御祝儀ものというだけである。その二曲に「同一技法」を取り入れる事によって段階的習得を確実なものとしている。実技者の立場から考えても、前述の通りいきなりある技法を習うよりも、くり返しくり返し学ぶ事によって自分の身体に馴染んでくると思う。つまり、技法習得の為の近道なのである。

これは非常に論理的に習得法を確立させた先人の知恵である。また下半身は同じでも上半身を変える事によってワンパターン化を避け、振りにふくらみを与えている。これは見逃せない貴重な技法の一つである。

以上、「松の緑」「老松」を取り上げ、志賀山流

における技法の段階的習得について研究した。ここでいう同一技法「ひねって出す」が、所作事舞踊の中ではどのような意義を持つのか、機会があれば取り上げてみたいと思う。